

はじめに

みなさんも名前をよくご存じのレオナルド・ダ・ヴィンチ。《ダ・ヴィンチ》とは《ヴィンチ村出身の》という意味で、それが姓として呼ばれるようになっただけのこと。だからこの本では、彼をレオナルドと呼ぶことにする。

2019年（令和元年）は、彼が亡くなつてちょうど500年の節目の年に当たる。そこで、この機会に彼のことをもつと深く知ってほしいという願いから、この本を書くことにした。《愛するものを深く知れば知るほど、その愛は大きくなる》（『絵画の書』77章）と、彼も言っているからである。

そのレオナルドは、一生の間に、ごくわずかな数の絵画作品と、膨大な数の《手稿》^{コディチエ}（ノートブックのこと）を、しかもややこしい「鏡文字」で書き残した。鏡文字とは、鏡に映さない普通の字に読めない、つむじ曲がりの文字のことである。

彼が史上空前の《絵を描かない大画家》で、《鏡文字で膨大な手稿を残した男》であつたのに対して、わたしの方はイタリア語学・イタリア文学の研究者で、たまたま20代のところから彼

の手稿の翻訳と出版に携わってきたのだが、もしレオナルドの手稿の国際共同出版事業のようなチャンスに恵まれなかったなら、自分ひとりで鏡文字の世界に入り込んで研究しようなどという、大それた野心は抱かなかつたかもしれない。

しかし、この幸運な巡り合わせのおかげで、わたしはメモや考察を無秩序に記した雑記帳にすぎない彼の手稿（それは秩序立った論考などではまったくなかった！）から、彼の人間観や自然観、地球論や宇宙論までを年代ごとに抽出して、その思索の変遷を跡付ける研究をすることができた。

すると、自分でも気づかないうちに——それはたぶん、わたしがなんの先入観も持たずに、鏡文字の世界から直接レオナルドの世界に飛び込んでしまったせいだと思うのだが——自然に彼の目で世界の事物を眺める癖がついてしまった！

わたしは、彼が一生記録し続けた森羅万象についての研究と、さらにわたし自身のライフワークであるイタリア演劇史の研究に忙殺されていたので、彼の絵画の研究は、美術史の先生方にお任せして、いわば平和な棲み分け^{すわ}をしてきた。しかし棲み分け^{すわ}と言っても、やはりお隣さんのことはなんとなく気になるもの。時おりそつとのぞき見をすると、なんとまあ現実離れした、夢のような話やトンデモ話がまことしやかに論じられているではないか……。しかもそれ

は、レオナルドの世界的權威を自認している人びとの口からだ。

そこで、もしわたしが鏡文字の世界でつちかつてきた、彼の目で世界を眺める方法を用いて彼の絵を眺めるなら、どのように見えてくるだろうか、という不遜な気持ちで頭をもたげてる。

そういうわけで、この本では、レオナルドのミラノ時代に限って、彼の制作した絵画や彫刻を、彼の目を通して見ることによって解説してみたい。

なぜミラノ時代なのか？ この時代の彼は、自分の名を世界に轟とどろかせる『最後の晩餐』や、巨大な『スフォルツァ騎馬像』などの大作に挑戦して、何年もの長い時間をかけて、ようやく完成することができた（騎馬像については完成とは言い難いのはあるが……）。これは、受注した大作を完成できないまま放棄するという、苦い記憶を持つ不幸なフィレンツェ時代とは大違いであった。

また、平和だったミラノ時代の後は、イタリア戦争と呼ばれる戦乱の世の中で、彼は芸術界の《傭兵隊長》としてさまざまな君主に仕え、人心を驚かす挑戦（『アンギアーリの戦い』や、飛行機実験や、巨大な反射鏡で太陽光を集めて敵軍に照射する光線兵器などの研究）を続けるが、ことごとく失敗に終わった。そして、最後に彼の手元には、注文者が亡くなって引き取り手のいない

作品である『モナ・リザ』、『聖アンナと聖母子』、『洗礼者聖ヨハネ』が残った。これらは彼が晩年まで手を入れ続けて、彼の死とともにようやく完成（？）した作品である。

このような後世に残る重い作品を作り上げるには、軽くて、はかなくて、気晴らしになるような時間が必要だ。ミラノ時代にはそれがふんだんにあった。この時代、彼は戦時には恐ろしい武器の発明家や軍事技師として活躍し、平時には宮廷の祝祭で奇想天外な夢の舞台を出現させ、勇壮な《ジヨストラ》（馬上槍試合）では人びとを啞然とさせる演出をし、宮廷ではエンターテイナーとしても活躍した。彼が30歳から47歳までを過ごした、20年近くにわたるミラノ時代は、心からの情熱と喜びをもって自分の責務（自分の名を世界に轟かせること）からの逸脱行為に熱中できた、レオナルドの人生の中で最も幸せな時代であったと言えるのである。

本書では、このミラノ時代について、彼の手稿や当時の史料によって、彼の宮廷人としての活躍の跡も再現してみたい。彼の華やかな宮廷人像の裏側には、実は暗い闇の部分も潜んでいた。これまで研究者たちは、彼の輝かしい姿に目がくらんで、その暗部が見えていなかったやうなので、この本ではこれまで人の立ち入ることのなかったその舞台裏にも踏み込んで検証してみたいと思っている。